

のつばやら手当たり次第に二階に上げたりで暇どり、裏口に出ると同時に波が押し寄せて来て腰までつかつたとか。父はそれでも波をかきわけてでも前に走ろうとする時、母は子供のころ祖母より聞かされた「津波の時は前に出んと裏に上がるんや」と言ったのが頭にひらめき、父をひこづつて裏に上り、土手伝いにお寺に上ったそうです。昔の話聞いていなければ二人共に押し流されてどうなっていたか分かりません。頑固な父も津波の話が出るたびに、「あの時は春枝にひきづられて助かった」と一つ話にしておりました。

—安政の津波には、土手に切干大根を干してあったのが、そのままあったので裏は大丈夫！—と聞かされていたそうです。

「いつかまた、忘れたところにやってくるので、おばあさんはもう会わんけど春枝はようおぼえとき、それから火の始末忘れんよう、なんぼあわてても素足で飛び出んように、必ずぞうりはいて」と折にふれ聞かされたのが、とつさの時に思い出して本当によかったです。

やっと夜が明けて家にもどってみると、どこから片付けてよいやら、「あいた口がふさがらんとはこのことや」と母、何しろ水洗便所でないのだからそこらあたり一杯で、「どないしよ、どないしよ」と立ちすくみました。父は「近所まわりして前のおばあさんが見当たらんというので、家の片付けどころでないよ飛んでいき、みなさん総出でくまなく捜しましたが見つからず、海の方も何日も何日も捜しました。ニコニコと私たちにもやさしかったおばあさんはどうとう見つからんままでした。もう一人四軒向こうのおばあさんは、たまたま牟岐の親戚に泊まっついて流され、出羽島では、おばあさん二人の犠牲者が出ました。」

家は相当傷んだ所もありましたが、軒までつかつても流れた家はありません。私の家はちようど襖の引手までつかりました。なかなか張り替えも間に合わず長い間、「ここまでつかつたんよ」と言うように線が入ったままでした。両親の布団もずぶ濡れかと思つたら畳の上に重い物がなかったようで、浮き上がって濡れずに助かりました。タンスの中の母のよそ行きの着物が全部つかつて、特に留袖の紋も裾模様も裏のモミが染んでしまつてあわれなものでした。私の一張羅の着物は幸に一番上に入っていたので無事でした。着物の洗濯など後まわしで毎日毎日床下をはぐつて、畳を干したり何日かかつたかそれは大変でした。大分日がたつてから、大八車を借りて辺川の川まで父と着物の塩出しに行つたり、いろんな目に会いました。

その後、赤痢患者があつちこちに出て、島でも何人かの人々が亡くなりました。私の育つた家は安政の津波の時に新築してまなしやつたとか、二回も津波に会つたわけで、建替えの時住みなれた家こぼしを心淋しく眺めておれば、近所のおじいさんが「津波に二回もあつたのはこの家だけやそれでも無事やつたのにつぶすのは惜しいナ！」とそんな声もあり感無量でした。これだけ進歩しているのに、津波も台風のように予測できればいいのにとつくづく思いました。

五十周年を機会にまさかの時に、安全な近道を家族みんなよく、よく話し合ひましょう。いつか役立つ日があつて欲しくありませんが、天災はいつ来るか分かりません。私の体験したこと感じたことを一筆したためました。